



アラソン

—ノルマンディー
人のプロポV
【2014年9月号】

翻訳：高村昌憲

六十一 ドイツ人の礼儀正しさ (COURTOISIE ALLEMANDE)

或るフランス人女性が、ドイツ人の男子学生と仲良くなって小旅行をします。彼女が見たのは申し分なく分別を弁えて礼儀正しい親切です。つまりこの行儀の良さは、アカデミー・フランセーズ会員がフランス中のフランス語を定義しているようなものです。彼女は考えます、「何と不公平なのでしょう。昨日、私は力学的で物理的な通りで高く評価されたフランスの町を教えて貰いましたが、今年は醜悪な田舎新聞が百五十人ものドイツ人学生を傷付けました。そして彼らの理性は、大変強いです。或るドイツ人の土方はフランス人上等兵を罵りました。二人とも多分、大変に沢山の酒を飲んでいました。そして私たちは、この愚か者や野卑な連中にやられっぱなしで、そこでのドイツ人は愚鈍で、呆れるほどの服装をしていて、銜学的で、馬鹿げた礼儀正しさが下品であると同時におべっか使いで横柄でもあります。一日に百回以上もの暴力沙汰があり、罵詈雑言は際限なくあります。しかし、もしもフランス人とドイツ人が色々な所で偶然に喧嘩をしたとしても、我が国の新聞は侮辱されたと思う必要はありません。ドイツの新聞も同じです。そこでは両国は停止して立ち止まるのです。活動するのは法務省です。そして両陣営の政治家たちは、彼らの国民が生活以上に尊厳を愛していると誇りを持って言います。彼らの纏まりのない低俗な下らない考えは、情け容赦なく判断し吟味しなければなりません。というのも、彼らは何を求めているのでしょうか。演壇での些細な成功であり、新聞記事が目的であり、割に受けの良い数行であり、もう少し権力を持つことであり、些細な不公平や巨額の費用に寛大であったりします。実際の十万人の英雄が、一本の糸によるかの如く支えている生活にも何ら心配をしません。他人の生活を与えることが今は英雄主義なのです」。

インクに代わって、如何に皮肉で平静な読者というものの精神に、これらの思想を刻み込まなければならぬのでしょうか。もしもその皮肉が十分に理解され、それらの文字が火傷となって刻まれたなら、恐らく彼らは最後には耐えられない感覚に襲われるでしょう。そして何もかも叫ぶことでしょう。「私たちは何も要求しなかったし、そのようなことを何も許してもいなかった。そこには私たちの精神も、判断も、幸福も、誇りも、正義もない」。しかし、世論という活動は成熟して行きます。少なくとも十二人程の自由な作家たちは、既に済んだことになるでしょう。しかし、もしも言葉が言い足りないとしても、総選挙での投票用紙は決して忘れないでしょう。

私としてはモーリス・バレス作『コレット・ボドジェ』で、ドイツ人の人物描写が重苦しく銜学的で大食家で、ビールの大酒飲みで、非妥協的で、気転が利かず、感謝の気持ちがないのを読んだ時、幸いにも敢えてフランス思想やフランス文学と呼ぶアカデミー・フランセーズに対する強い憤りを私は感じました。私の同僚は黒人でしたが、一人ひとりには誰にも信用がありました。私は、彼が騙したとしても、彼の理性と判断を先ず考えます。泥棒が私を狙っても、防ぐ準備は出来ております。私が病気になったなら、丸剤やカラシ硬膏を用意します。もし私が中傷されたなら、真実に従って証明し、犬に対しては子供を守り、酔っ払いに対しては女性を守り、哀れな老人たちには丁寧にして小銭を与える用意があります。以上のように、私が期待しているのは、

まだ私の見知らぬ人々です。もっと適切に言うなら、大変に率直なドイツ人の中で、時として非常に奥深い人物で、大変自然に詩人となっている人々で、その典型はゲーテであり、シラーであり、ハイネであり、カントであり、ヘーゲルです。そして、見知らぬ読者であるあなた方は、全て私と同じです。よろしい、一日に二度か三度は、率直にそのことを口に出して言うのを義務にしてください。平和は確かなものになるでしょう。

(一九一三年九月六日)

六十二 痴情による犯罪 (CRIMES PASSIONNELS)

報道記者たちは、泥棒、詐欺及び物を奪うその他の違法行為によりも、人格に対する犯罪には大変甘いことに気付かされる機会が良くあります。財布に開いた穴よりも、人間の肌を開いた穴の方がより重大であると誰もが認めているのですから、この間違った価値観は変えるように思わなければなりません。しかし、人間たちの財産が極めて細心に保護されるなら、大変な不幸になるのは何故なのかも理解しなければなりません。

人間には、物のような契約も交換もないことに先ず気付いて下さい。その人間は決して売り物ではありません。他人については、自分の人格は決してありません。物については常に権利があります。でも、愛とか友情の権利というのはお笑い種です。尊敬の権利というのも直ぐに笑われます。何時も自由である前に、他人に対して人格に甘えるその様なものは、何も人格を要求することが出来ません。執行史が推量で強制することはありません。この原則は十分理解されており、恐らく人格は神聖なものになります。人を殺しても罰せられずに済むことが可能な原則があるのもこれと同じです。人格の間の関係も、まさしく権利を超えてあるからですが、まさにそれ故に既に権利の領域にあります。それなのに、どうして軽蔑されないのでしょうか。裁判官たちは何でも黙っていますし、悪口や償いにも判断出来ないでおります。そこから正義は自由で、一人ひとりが王であり、そして放って置かれます。

全ての痴情による犯罪を考えて下さい。それらは侮辱に対して復讐するために行われます。侮辱とは何でしょうか。それは誰かの所有物が破壊されたとか泥棒に遭ったのではありません。それは評価とか尊敬とか愛情の気持ちが拒絶されることです。一つの言葉によって軽蔑されます。それは決闘の時に良く分かりますし、大変容易に黙認されております。まさしくその時は、あらゆる権利の方法が無効になっているからです。心の奥底において、戦争は決して他人事ではありません。利権による戦争や物資についての要求は、何時でもハーグ万国平和会議が行われた王国政府へ持ち込めます。しかし、無視されたと思っている国民は、もう途轍もない決闘のことしか考えません。注目すべきことは、それが物質で重さが量れて測定可能なものである時は問題にならず、処罰が剥き出しになります。もっと適切に言いましょう。処罰でなくはないのですが、侮辱そのもののよう、何も測定出来ないものです。

憲兵たちは監獄によって女性にもてるのではなく、男性から評価されるのでもなく、友情が生まれるのでもなく、最終的な価値になるのでもなく、他者からの自由な同意によって私は評価します。人間の死が何らかの金銭で満足する時、侮辱に対しては血が望まれます。女性の不貞によって侮辱された男性に、裁判官は何が出来るのでしょうか。恐らく何も出来ない理由は、法が全てを少しも守っていない事件において、法を超え始めれば余りにずっと寛大であり続けたことが分かるからです。

何か反論が望まれます。「でも、卑怯にも殺す代わりに、あなたは叩きなさい。危険に晒しなさい」。しかし陪審員を前にすると、痴情による犯罪はそんな風になりません。被告は、一般的に許しも求めません。最早、自分の権利を少しも要求しません。例えばドン・フォセは、「あな

たは私を捕まえることが出来る。あなたを殺したのは私だ、カルメン。愛しのカルメンよ」と、この様に言います。殆ど何時も弁護士と陪審員は、殺人者にもかかわらず殺人者を助けます。無罪放免する時に、侮辱された人が殺す権利を持っている、と言う話を聞くことは全くありません。寧ろ、その権利には言うべきことが完全にはないのが分かり切っています。何故なら、何も妨げなかったからです。裁判所は、夫の名誉を助けることが出来ませんでした。軽蔑する者は、あらゆるリスクを負っています。このようにして私たちが語る道徳は一時的になります。

(一九一三年九月九日)

風切りを付けた蒸気機関車を見て、人々はびっくりしました。この発明は当時、物議を醸しました。新聞記者は記事を書き、技術者たちは大いに称賛されました。機関車の前方にあるこの鋭い防備具は、想像力を掻き立てました。大気を引き裂いて行きました。でも、それは大きな間違いでした。そこから理解出来ることは、技術者とは時々想像力を働かせる人間で、常識的な人間ではないということです。

その問題が、経験から正確な結論を出したのは、そんなにも昔のことではありません。流体とか気体とか水の中で動くのに、一番良い形状は前方が丸く、後方が尖った物です。ところが理論では、余りに単純な問題について呆れる程に失敗し得ることを、この事例は良く理解させてくれます。というのも如何なる力学の数学者も、この新しい形状を発表することが出来なかったからです。空気を引き裂くためには刃とか尖った物でなければならない、と誰もが想像していました。頭脳が強いのは珍しいことである、という結論付けをしましょう。

それ故に発明後には理論を打ち立てなければなりません。そうして言えることは以下のとおりです。私は、水の中でばらばらにならないプラスチックの塊を、自然にその重心を押し動かそうとします。それがどんな形になるでしょうか。前方は細く尖っておりません。寧ろ丸くなっています。後方は反対に尖っています。但し、この経験はまさに実際に行われたことでしたし、理解出来ないことは何もありません。常識は、結果を受け入れるための想像力と結びつきます。従ってそこでの私は理性的です。まさにこの形状をした固体が水には最小の抵抗です。私は、水がプラスチック製品に与えている応力はこの形になると思います。そして事物についてじっくりと思考する人間であったなら、何においても予想出来ないことは一つもなかった、と私には思えます。しかし現代の技術者たちは、木を割るには斧を使うように、空気を引き裂くには風切りを用いました。割れた木は割れた儘ですが、流体はナイフの上に舞い戻って来ます。

観察者は前方が丸いこの形状を予想していましたが、腑に落ちません。魚の前方は良く丸くなっており、後方は必ず尖っています。昔から船の形も同じです。しかし、魚雷艇は前方が尖っています。そこには想像している人間としての技術者の痕跡があります。鳥は良く丸い頭をしています。翼の前方は丸く、後方は尖っています。胸は半球体を描いています。それに対して砲弾は尖っています。もしその物体に抵抗が生じれば、ひっくり返ることになります。そして想像していた人間としての砲兵たちが、何度も驚いていたことを私は本で読みました。無邪気な精神をもった人々は、飲み込んだ針も尖った方を前にして体中を巡っていると信じていました。しかし、そうではありません。体内の反作用や収縮による液体の中で、針は重い端を先頭にして行きます。ですから決して刺さって害を与えません。いずれにしても同じ法則によるのですが、技術者たちは決して見抜きませんでした。

(一九一三年九月十六日)

私が好きな小説の一つである『赤と黒』のテーマについて「あなたは、上品な偽善者であるジュリアン・ソレルをどうして愛することが出来るのか」と良く言われます。そうです、私は彼を愛しています。そして、生活費を稼ぐために自分の考えを隠している者を、私は何時も愛しています。何時も高邁な思想の持ち主であるのを自慢出来る共和主義者は沢山おりません。私が見るところ、誠実な者は敢えて他人事のように言う者であるか、少なくとも黙っている者です。精神的に自由になっていなくても、それでも自由な判断力と自分本来の思想を守ることは知っています。性格によってやむを得ず監獄生活を送りながら、六年後に頑強な肉体と申し分なく健康になった囚人である限り、私は彼を評価します。要するに私の考えでは、思想の力は思想によって見分けられ、慎重でなければ会話もしません。反対に弱い精神の人々は、言えることしか考えません。従って彼らに偽善者はおりません。そうです、一人もおりません。しかし外部からの強制が彼らを精神的な奴隷に戻します。そして彼らは最後に奴隷制度を崇め、それを自由と呼びます。独裁者には心地よい瞬間です。というのも彼はそれを望んでいるからです。

いいえ、私は偽善のことを多く理解しておりませんでした。私の理解は余りに少なかったのです。私が外部からの強制に我慢することを（そして我慢しないことも）知った者たちは、直ぐに監獄が服従させるこれらの囚人たちに似て来ました。そして或る者たちは、今の利益に従って大変に上手く考えを変えましたが、彼らは少しも変わっていなかったことを信じていました。弱い精神のこの率直さは良く人目を引きます。でも、何なのでしょう。大変に怖いと思っている子供よりも率直で正直な者は誰もおりません。地位とか昇進を与える者を意味する〈先生〉とは、実際に何と大人物の人なのでしょう。宮廷人のお世辞は、偽善ではありません。宮廷人は王座を崇拜します。許される者がそこに着きます。そして宮廷人が称賛する時は、眼に涙を浮かべます。本当の涙です。この本当の涙に私は赤面します。

ジュリアン・ソレルは反対に不屈の捕虜です。彼の判断は独白の中で飛び上がります。強くもない精神の持ち主は、爵位を持った悪戯っ子としてこの世の中で、恥ずかしくない名を悪戯の代わりに探します。しかし、ジュリアン・ソレル自身の心の中で立ち上がるのが彼です。彼の精神は決して崇められません。その上時折、それは活発な活動になって行きます。そこに小説が生まれます。

私はここで更に言うべきことがあります。それは人間が偽善者に成れば成る程、本質的な能力を残して置き、最後にはついにその能力を発揮することです。その代わりに英雄たちは率直であるのを私は知っております。彼らは全てが外へ向かっています。手の上に心があります。彼らは喝采し、称賛し、祝います。彼らにお金を出す者は、損をしません。彼らの本心が買えるのです。世論という暴君に折れた人々、修道会が導く人々の全員、あるいは正面から思考しない全ての人々を、あなたの周りで良く観察して下さい。彼らの哀れな奴隷制度は何処にあるのでしょうか。この点において彼らは率直なのです。悲しいことです。

(一九一三年九月十九日)

私は人権連盟の黄色い小冊子を受け取りました。そこには、本格的な雑誌に変えることを考えていると書かれています。というのも、その小冊子はカタログに少し似すぎているからです。それが最も素晴らしいカタログであるのは本当です。不正に対する抗議文があり、番号が付けられていて、執拗に更新されています。それは歴史において完全に美しく新鮮です。恐らく世界に一つしかないものです。そこではだんだんと美しい話も見付かります。それらの精神の原則は忘れないものになります。しかし、苦情や手続きや損害賠償の一覧表は、もっと立派で見事です。何故なら、それらは行動したものであるからです。

今、その冊子は余り読み易くないと言うのが正解ですが、あなたはその理由が良く分かっています。お金がないのです。沢山の音楽雑誌があり、見た目には大変に豊かです。詩の雑誌が幾つもありますが、それらにお金を出して買う読者はおりません。裕福な多くの人々は、芸術や文学の雑誌にしがみつきます。それは軽蔑すべきではありません。しかし、〈正義〉は苦勞が報われておりません。そんなものでも私は気に入っております。

私は、見た目に最も美しく、最も読んで楽しく、最も安価な雑誌を良く夢に見ました。五十名程の人々が利害を離れて楽しみで書き、糊口を凌ぐためでなく、それで十分なのです。人権連盟以外は目もくれずに、彼らのものが求められ、良質であると私は信じています。あらゆる主題の記事が遜色なく、殊の外優れたものとして読めるのです。濫用や抗議や更正に関する作品目録も忘れないことです。これらは、このユニークな〈雑誌〉のバラストであり、中心であり、理念の本体のようなものです。従って優れた作家たちは、一人ひとりがあらゆる種類の思想を全く自由に自然に分析し、主要な部分ではなく小さな争いに先ず登録されます。この争いには規律が保証されます。既に、実際に奇跡が一つありました。それはドレフュス事件であり、驚くべき統一、深くて本当に理論上の統一を生んだのは確かです。何故なら、それが何時も思想を齎す行為であるからです。この幸福な時間においては、直ぐに危険に晒されますが、薬はありません。思考は情熱に這入り込みました。かくして観念が生まれます。先入観による職業上の利益や野心やアカデミー的偏見というものに一挙に勝利しなければなりません。これらの厳しい状態を抜け出して、あなたは公平に思考します。所謂政治から、つまり巧妙で抜け目がなく冷淡なものから、あなたを守るのです。はっきりしているのは、それが利益のある割の良い嘘よりも更に優れていることです。しかし、私が決して政治的色合いがなく、〈雑誌〉の理念と理解している公平な〈雑誌〉を失うことは、最悪の政治がそこに支配するようになり、野心を生み出すものになります。人権連盟の会員によって選ばれた五十名の記者たちは、如何なる者にも支配されないこと、一つの意見に決して怖じけないこと、そして特に黄色い美しい〈カタログ〉と決して乖離しないことを誓うのです。そのカタログは、税関史が不当にも更迭されたことや、同様の事柄が書かれているのを人々は読みます。それは正義の年鑑ですが、他の年鑑が絵や版画で飾られているように、観念や思考で飾られているのです。

(一九一三年九月二日)

六十六 市民の義務（LES DEVOIRS DU CITOYEN）

何でも自由に意見を言う友人仲間で昨日、大論争がありました。「隠れ家を求めて逃げ回っている犯罪者を引き渡さなければならないのでしょうか。更に、もし機会があったなら、憲兵と一緒になって罾を仕掛けなければならないのでしょうか。そして、徴用された農民が、ピストルを持って逃げている恐ろしい犯罪者の足に弾丸を撃つのを、あなたはどう思いますか」。

その点について大変俗悪で直接的な意見があります。それは犯罪を考える時、恐怖と怒りが齎すものがあるということです。こう話してよければ、それは犯人を殺戮する者たちの精神状態です。この考えは、ある状況においては最も有効になり得ます。しかし、今は良く考えることが大切です。つまり感情の最初の動きである、いわば機械のようでしかなく、人間のものではない狩のような追跡の動きを乗り越えることです。そこには思想的にリンチを加える恐ろしい野獣のような人間は誰もおりませんでした。良く考えられた最高の意見は、犯人を逮捕するのが義務で、厳格な義務であったということでした。そうでないと共犯の罪になって仕舞います。単に法に照らすばかりでなく、良心から見ても共犯の罪になって仕舞います。そして、その上に人間というものは、火事に対するのと同じように逮捕を必要とされています。

しかし、或る女性が雄弁に抗議しました。彼女は言いました、「既に大変に強い権力者たちを助けるのは卑怯だわ。一人に対して多分百人も集めているのね。警察官の仕事を無償で行うためには、その仕事を大いに愛さなければなりません。その仕事のためにお金を支払う者たちに逮捕を任せる方が、もっと適切だと私は感じます。そして私は、彼が面白半分で彼の仕事とは別に逮捕するとか告発するようなことがあれば、何時でも軽蔑するのは確かですわ」。

しかし、或る人が言いました、「それはまだ本能でしかない。彼は防衛本能に逆らっているのだ。そして私は道德の問題を、大変に強い人なら本能によって決定する人々を素晴らしいと感じている。人間は本能に基づく治安によって人間になるしかない。というのも本能は支離滅裂であるからだ。それでも明日になれば、肯定的な本能がドイツ人たちに対して手に持っていた銃を私に投げてよこすのである。もし彼らが私の敵であるなら、あるいは私は彼らのものであるなら、彼らが少しも軽々しく信じていないなら、少なくとも私は権利を求めることはない。そしてその上法律は私に義務を負わせるが、私は決して否認することはない。十分に注目すべきことは、一寸前に大変に明白な義務を否認した本能が、同じ人の口で今は肯定していることである。そして、兵隊が尊敬され、警官を軽蔑したがることは非常に面白いことである。兵隊は本能そのものである」。

もう一人の人が言いました、「しかし、私はここに君主制擁護者の精神を見ますし、現代でもまだ十分に健在で、一つの力になっています。それは必要悪です。何世紀もの付与の間に、権力は逮捕したり、裁判したり、首を切る任務を帯びて来ます。それは偶然の出来事によって役に立つ働きがありますが、私たちには不可解です。権力とは結局のところ皆の敵です。軍隊名簿に載せたり、お金を払うこともなく権力を手助けする者は、良く見える洋服で目立っていても、一種の裏切り者です。君主制擁護者の本能は、権力を尊重すると同時に軽蔑もするという矛盾を含ん

でいます。しかし市民というものは、権力者の行為に責任があります。誰にも責任を回避する権利はありません。私たちは投獄され、裁判にかけられ、ギロチンにかけられます。私たちは皆が警察力の一部です。そして無罪や法律上の手続きのために私たちが立ち上がるので、犯人が逃げる道は封鎖されます。それは王としての義務です。私たちは皆が王です。そして一面では君主制擁護者の精神は、この国事の役目を拒絶しているのであり、権威者へ任せているのです。君主制擁護者は、回り道をしながらもある意味では個人の自由を支持しています。道徳を司祭へ委ねるように、治安を王に委ねます」。

(一九一三年九月二六日)

或る大臣とか昔の大臣に反対する話の一つか二つを、証拠もなく話す楽しみに人は良く陥ります。私が偶然それをやった時は、行動規範の一つに欠けていたのです。「決して誰とも話をしないこと」。会話がこの泥だらけの溝に陥ったので、その善き市民は突然怒りました。「百万フランを貰ったX、王位継承権を主張する者と陰謀を企てるY、そしてローマ法王の使者と会ったZと共に静かにして置いてくれ。単に私はこれらの話を少しも信じたくないばかりでなく、聞きたくもないのです。私は怒りを全て拒絶します。実のところ、憎しみが無いのに中傷することは何よりも最悪です。愚か者は誰でもその時、名誉を大切にするのでしょうか。まるで敵のようなあなたの友人たちは、この汚辱を受けるのでしょうか。しかし、あなたはそれが何時もドレフュス事件であると理解していません。人々が言いふらしているのは馬鹿げた伝説です。何ということでしょう。この強烈な教訓を忘れないで置きましょう。誰にも構わずに、何でも人は言います。そこから始まります。ドレフュス派の人々は、何か非難されなかったのでしょうか。或る人は三万フラン受け取ったことを言いますし、他の人は一万フランであると言います。私は市民であり、はっきりしないこれらの話は全て否定します。私は、それらのことを読みませんし聞きもしません。私はそれらを国民生活から一掃します。通信社からの公用文書、議会議事録、公式演説集を私は読みました。そして私は全てを知りたいと思います。そうです、重要なことは全て知りたいのです。もしも告発されるなら、それは公平であり、礼儀に従っているのです。そして告発者は死んで、十分に罰を受けます。しかし実際には、惨めで優柔不断なこれらの対象者たちを、あなたが私の考えに与えるのは如何なる権利によるのでしょうか。何故でしょうか。これらのことを言いふらす下劣な者たちは、私の政治を変えるのでしょうか。いいえ、そうではありません。私には、議論を憎むことよりも良いことなのです。私は、私の小さな王国ではそれを禁じます。以上です」。強烈な教訓は、考えるには良いものです。

その翌日、大統領の旅行について幾つかの軽い冗談が言われていました。彼は更に飛び上がってびっくりしています。「それは取るに足りないことだ。公務の旅行が齎した会計は全てが滑稽と言っても良く、崇高と言っても良いものだ。それに遣う才能次第である。私は、大統領が党派を超えても、憲法とその運用だけで満足している。それを崇めているのではない。私は何も崇めていない。私は、その人間の地位を確立しているのである。それが気に入れば、私は大臣たちを攻撃する。しかし、彼らのやり方には従う。彼らの個性を私は気に留めない。幸いにも、それは重要ではない。もし私たちがしっかりしていて、正しく投票して、能力とか法律を批判したなら、彼らは屈服し、逃げて、変わるだろう。私は彼らが考えていることを無視する。彼らが行っていることを私は見詰める。あなたは何時もそのことを言っている。「彼はこの法律を望んだ。危険な人間だ」。私が危険と思うのは、この言葉である。危険な人間など決していない。私たちが服従することしか求めない野心家たちがいるのである。あなたの話によれば、私たちの心には絶対的暴君がいて、くじ引きで手に入れていると言われているのであろうか。私にとって憎しみは、崇める事と同じに愚かである。そして、私は言う。国民は個人を回復せよ。しかし、私は敢え

て言う。枝葉末節を回復せよ」。

(一九一三年九月二七日)

六十八 戦争の法則 (LA LOI DE LA GUERRE)

力が戦争の法則であるというのは滑稽な考えです。市民は今のところ、財産を殖やすために戦いません。そんなものは山賊の争いです。そして山賊は、事態が悪くなると分かると逃げ出します。もしも生命が安全であると考えたなら、降伏するのも大変に上手です。そこには力による法則があります。この法則によれば、人間は激しい怒りによって殺すだけです。でも、それは愚か者です。というのも彼は何を求めているというのでしょうか。お金持ち、権力者あるいは安全でしょうか。死ねばこれらのものと希望は全て消し去るのであり、手の施しようがありません。

現代の戦争は、義務という考えが驚くべき力を持っていて、愛する生活よりも確かに大きなものであると想定しています。そして、それが本当であるなら、感心して驚かなければなりません。フランス革命前は、他のことが出来ても王の財産や君主のためになると言っては王の臣下に大変驚かされました。名将チュレンヌ元帥後の二世紀は、農民、食料品屋、土木業者にとって俗悪な道徳でした。命令で戦争に参加しました。そこで手に入れるべきものは何もなく、損得勘定で平和であることは許されないと言いながらも、チュレンヌ元帥に大変に驚かされてもいたのです。平和になるには逃げるか、降伏することです。そして伝統や慣例によって、更にそれは軍人の名誉と両立出来るものですが、少なくともそれは隊長に関してのことです。市民は名誉を傷付けることなくその様な野望を敢えて口に出して言えません。少なくとも、人から言われたり信じられた後では言えません。

市民にとっては今日、兵役の義務は嘗ての古代ローマ軍団に見るようには行われていません。というのも市民は、戦うことが仕事ではないからです。他に仕事があるのです。市民は労働と事業を愛し、自然と暴力を敵にしています。それと共に市民は、一つの命令で恐ろしい戦争に投じられるという考えで生活し、力づくにしろ巧妙さからにしろ、それから免れる如何なる方法もなく、死に身を晒しています。というのも全てが砲弾次第であるからです。市民は実際に生命を犠牲にしています。単独での手柄という誘惑もありません。何故なら、その英雄主義は平凡な状態であることであるからです。

そして、それにも拘わらず、その心の中は全く偽善がありませんし、恐ろしい戦争を与えるものになります。利己主義の感情は何時も力強く、動物は殆ど眠らず、権利と正義は哀れな抽象観念です。そして、もしも力が全てを決定するなら、三倍も愚かです。攻撃するためには如何なる連隊が見付かるのでしょうか。自由、博愛、平等という奇跡によって、平凡な人間が今は利益や自分の人生さえも超えて、良く服従するのは本当のことです。戦争が何百万人もの人間の心の裡に想定させているのは、高い美徳のためであると敢えて言って下さい。永遠の平和を築くものは何もないのです。

(一九一三年十月四日)

六十九 教科書 (LIVRES SCOLAIRES)

親たちが教科書の変更や高値に反対の要求をする季節です。その力は大したことが出来ません。というのも出版社は、当然に多様性や複雑性や更新を推進しているからです。しかし、これらの出版社は策謀や友情によってしか権力者になれないとも言わなければなりません。既に、暫く前に亡くなった総監の名が話題になっていますが、彼は何ら遠回りの婉曲的な言い方もせずに、自分の出版社の教科書を推薦していました。ところがそのことは、殆ど注意されませんでした。私たちが生きているこの時代は、至る所で示される偉大な自由が愛されます。不公平な権力も減少し、物事はより良く運用されて行くばかりなのでしょう。

算数、幾何、天文学、物理、化学の概論書が先ず第一に出版される時は、国立印刷所が恙無く使われ、原価で販売されます。厳格な制限を自然に設けられている学者たちのうち、或る委員が書いた歴史の教科書に対する考えを私は強く勧めました。学者たちが争っていることに異論はありません。絶対的な権力者が平和を築きます。ここではきちんと支払いをして、期限を厳格に守ることで十分です。議論されるようなことは全て消えてなくなり、それが公正な歴史になっていることが分かって来ます。

道徳にとっても同じです。私は、万人に認められている沢山の良い格言を、教科書に集めることは不可能ではないと思います。伝統主義者たちにおいては、政教分離政策は一見ふらふらして曖昧であるように思われていますが、それは決して真実ではありません。この教科書という公的な著作の中に私は、宗教についての章が欲しいと思います。そうです、哲学を専門とする博士を五人入れて下さい。そして五人の考えが一致した時にしか満足しないで下さい。まだ時間が余りに短いのです。

しかし、私は美しい紙に綺麗に印刷された我が国の古典作品で、注釈がなく出版されたものを望んでいます。今の子供たちが読んでいるモリエールやコルネイユやラシーヌやラ・フォンテーヌのものを考えてみて下さい。注釈は時々、本文よりも長くなっています。そして、それらのつまらない言葉は、本文を台無しにしています。私は教授の注釈を認めますが、通過して飛び越して仕舞います。すると本文は途方もない記念建造物的な堅固さを保っています。しかし、あなたが本文を歪(いびつ)にして記されている数字や、頁の方にある多くの注に目を留める時は、その建造物の小石の中であなたは観光ガイドの話を書き刻んでいたようなものです。更に何でも言って良いなら、このずっしりと重そうな選集は即興を溷らして、フランス語による独自の解釈さえも不可能にしています。というのも注の中に意味を探して、本文の中を探さないからです。注釈書や入門書を見れば、コルネイユの悲劇「ル・シッド」やモリエールの喜劇「タルチュフ」や「守銭奴」が少しは分かって来て、気高い性格の持ち主になります。これらの作品は、鉄柵で周りを囲まれた立像になっているようです。

(一九一三年十月六日)

「正しい理性の働きは全てが無礼である」。この様にスタンダールは語っています。少し強すぎる言葉ですが、彼自身が僅かな言葉で断定し前例を与えているのですから無礼です。そのことを理解するには、カトリックの力を理解することです。司祭たちが集まり、指導していますが、それは情熱の中にあります。それは規制されています。最早単純なものは何もありません。人間は脅します。もしも、あなたが彼を怖がらせたなら、彼はもう脅しません。彼が従う時は、やはり馬鹿正直な人間です。暴君たちには礼儀正しさがあり、少しも議論することがなく、何時も力尽くで行います。規律を守るべき人である工場長とか学校の先生とか将校たちには、合理的でありたいという人よりも厳しく野獣のような人が良く愛されるという驚くべき結論に屢々達します。情熱の自然な働きによれば、雷は崇められます。何故人は一般に強い力を持つ者を愛するのかを良く観察して下さい。人間たちは、動物的性質によって宗教的になっているのをあなたは理解します。王様は議論するまでに降りて来ることが決してないので、力以外の何ものでもありません。人間は容易に権力に服従します。この偉大な宇宙がその様に創り上げたのです。結局のところ、それは戦争において気に入られます。如何なる欺瞞もない力による賭けです。敗者も決して侮辱されません。何故でしょうか。何故なら敗者に与えられる力は、まさしく敗者に相応しい情熱であり、落胆であり、平和が必要であるからです。そうなることを前もって検討することはありません。兵士は兵士でしかなく、非常に上手く降参しますし、勝者には敬意を払います。

反対に、精神の戦いは苛々します。というのも正しい理性の働きは強制しないからです。丁寧に敵自身の情熱を落ち着かせようとし、そのことは罪の意識によって、屈辱的で大変に辛い敵自身に反対する戦いに身を投じます。人間は地位を望みますし、それを手に入れるために努力します。競争者たちには全く権利も才能もないと信じる必要があります。それらのことを決して認識せずに、仕事を考慮しなかったことを言うようにしてご覧下さい。あなたは十回に九回は正しくなります。しかし、どんな顔でもあなたに見させないのです。あなたは高価で立派な望みを殺すように促します。あるいは車のお金を払いに行く人と一緒に贅沢について良く考えて下さい。それは意志的な苦痛を招くこととなります。彼はあなたが嫌い、あなたを抹殺します。彼の考えからあなたを追放します。しかし、もしもあなたが彼の賭けた二万フランを獲得したなら、あなたには最早盲目的な力しかありません。彼は心の底で、あなたの好運を崇めます。幸福な人間は〈賞賛〉されます。理性的で合理的な人間は賞賛されません。あるいは浪費家にお金の計算を彼と一緒にすることを勧めます。恐らくもう強く傷付けるものは何もありません。その代わりに、もしも彼があなたからお金を借りたくなっても、あなたはきっぱりと断ったなら、かれは最早そのことを考えません。正しくありたいという理性の働きに対して、お金持ちや権力者であることから物事が決められる時があります。純真な論理家は〈幼稚な人間〉です。そして幼稚な人間が嫌悪するものは、まさにカトリック教です。

(一九一三年十月十七日)

(次章へ続く)

タンゴと祖国愛の混合は、道徳的な意図と軽薄さを誇示するものです(1)。敢えて研究所を創りましたが、その初期の運動が続いていたなら、その老人(2)は赤面したことでしょう。髪が白いのを考慮するなら或る種の観念を探す方が良く、敢えて言うならその哀れな美辞麗句に隠れているのです。

それは軍人と無為と軽薄さという古くからの観念です。別の言い方をするなら、辛い仕事です。軍人は勇気を養われます。それを見せなければならぬことが唯一の美德です。その他のことは無視します。全てに身を投じる戦闘以外は、何も真に受けません。そして、翌々日のことを考えるのは何のためなのでしょう。翌日が楽しい怒りになることを望み、慎重さを完全に忘れるためなのでしょう。酒を飲みましょう。踊りましょう。愛しましょう。まさしく私たちがやらねばならないことです。私は楽しみを味わうことが出来ますし、節度がありません。というのも、最も恐ろしい懷疑が私の道にあるからです。私は、武器の音で飛び上がれるとするなら、ヴィーナスの腕に抱かれたマルスのように、何も出来ずに弱くなるかもしれません。そして誰が自分の人生を約束した人間を許さないのでしょうか。そして誰が報いるのでしょうか。その上で、彼はまさしくそうでなければなりません。武装されて勇氣ある者は、好みとか権力とか何でも許されます。忍耐とか貞節とか節度という美德は、職人のあなたにとっては良いものですが、戦闘中は倉の中に隠して置くことになります。そして、あなたは軍人としての栄光を決して望みません。「軍人たちはお金を遣う。何を生産しているのだろうか」。何故なら、彼らは胸元の勲章に身銭を切りながら、他人の仕事を守るのが役目であるからです。そしてそのことが、恋の機会やダンスやお祭りに参加することを十分に正当化しています。

以上、何らかの関係によって何世紀もの間に、恋の喜びと軍職は一緒に結びつきました。そして演説家は長年の習慣から、王の饗宴と軍職が組合せになっているのに気付きます。シラノ・ド・ベルジュラックは、何でも嘲笑して意に介しません。何故なら彼は正直であるからです。又その〈崇高さ〉は、その意味で言うなら近衛騎兵の挑発にドン・ファンの無礼を自然に結びつけます。貴族は決して滑稽ではありません。そしてブルジョアがもしも笑いたければ、その中で笑うことを覚えるに違いありません。もしも〈崇高さ〉が望むなら、タンゴも崇高になります。そして演説家は十分なお金を支払って貰い、勇氣を忘れることなく、気に入って貰うのを命じられた新しい踊りを称賛します。妨害するものを手玉に取るのに、何の苦勞も必要ありません。その対照は輝いています。それには真実の何かがあります。〈祖国〉のために明日死ぬこの若きダンサーには、何という美しさがあるのでしょうか。

不幸なことに演説家にとって、花飾りが古く、歌も古くなったのはその時でしかありません。今日では、一年中働くのも自殺して仕舞うのも同じことです。土木職人の第一人者たちは掟として、理想の騎士ベイヤール(3)の美德を理解させていると言われています。その生活は現代では厳格に栄光に包まれています。彼は、火と鍛冶の神ウルカヌスであり、マルスです。新しい年の花束と同じように、年老いているが殆ど新鮮でもあるこのアナクレオン(4)は、私たちに何を

望んでいるのでしょうか。

(一九一三年十月二九日)

- (1) タンゴはアルゼンチンに生まれて、一九一二年にフランスで流行した。
- (2) ジャン・リシュパン (一八四九～一九二六) のことであり、彼はアルジェリア生まれの詩人・小説家でアカデミー会員であった。
- (3) ベイヤール (一四七六～一五二四) は、シャルル八世から三代の王に仕えた理想の騎士。
- (4) アナクレオン (前六世紀後半) は、古代ギリシャの抒情詩人で、宮廷生活を背景に酒と恋を歌った。

飛行機の理論家が骨を折って事物の正しい説明を探究している間に、飛行機乗りは既に上空におります。そして、その飛行機乗りは実際に飛んでいる時、理性で飛びたいと思っている人間のことを笑っています。「私は飛び方を知っているのだ」と、大胆なその飛行機乗りは言います。この種の人間は少なくとも、定義に基づいて二足す二は四であることを、わざわざ正確に証明するライプニッツを嘲笑します。大胆な飛行機乗りは「私は上手く成功した」と言います。この決まり文句には注意しなければなりません。そこには少しも躊躇いがなく、恐らく公平さも正義もありません。

真実を知ること、力にとっての何ものかです。しかし真実を知る精神は、間違った精神であるかもしれません。狂人は偶然から真理を言うかもしれませんが、やはり狂人は狂人であると古代の禁欲主義者たちは言いました。逆に、真実を外して仕舞う精神がそれにも拘わらず正しい精神であると言えることが良くある、と言うのがデカルトでした。彼の物理は、今では全てが間違った思考の織物のように見えますが、やはり未だに正しい思想です。彼はお金を稼ぎませんでした、十分に楽しんで遊んでいました。仮定を明白にして、理性を十分に働かすことに注意して、合理的に思考したのであると私は理解しています。多分、彼は何か間に合わせの経験によって真実を手に入れるよりも、合理的で系統立って間違える方を愛したのです。

しかし、行動する人間は飛んで行きます。「あなたは私を馬鹿にする。私が望んでいるのは真実だ。私は屢々釣りをする人間であり、何も取れない人を馬鹿にする。一匹の魚が、もしもあなたを喜ばせるのであるなら、私が真実を理解するのは、それに成功することである。結局のところ装置は飛ぶためにある。というのも、そこに真実があるからだ。そして注意深くて細心の学者ぶるペタンチックな人は、大地に止まっているばかりで飛ぶことがないからだ」。

この話が大声で言われます。もっと正確に言おう。それは〈力〉そのものに関する話です。何故なら、もしも勝利が全てを決定するのなら、勝利者は常に学識があつて公正で尊敬される人であるからです。そして歓呼で行われる人民投票は、最も高く飛んだ人間を何時も選出します。しかし、一人ひとりの心の中には公正な思考という、細心に調べる人がいて、静かに熟考する時間の中に力を十分に持っています。というのも、本来の自分の思考を大事にする人間には尊敬すべきものしかないからです。大金を手に入れる時も、進んで理性の働きを無視するのを許さないと私は思います。そして、そこにあるのは恐らく本当の正直という正体です。彼という人間は、極めて良心的な思考の価値を少しも知りません。私は彼が走るのを見ています。彼は目標に到達した最初の人間であり、勝利を受け取ります。そして、そこにあるのは権利という概念が全てです。ところが〈権利〉は〈理論〉の兄弟です。正義とは多分、金勘定や会計における明朗さ以外の何ものでもありません。

(一九一三年十一月三日)

宮廷人とは暴君です。同類の者たちのうちの一人は、何か言うのが恐くて大変に厳格な依存関係を保っているのを自由に思考する人間が気付く時、決して思考しないのが習慣になります。自由に思考する人間は、暴君とか隊長とか使用者とか主任司祭への怒りの感情を感じますが、犠牲者への陳謝も容易に味わいます。ある興奮した集会に引っぱり込まれた儘で、所属する人々から受ける印象が悪く見えるとか、窓口で良く罵られる人間は、直ぐに言います、「そうだ、確かに私はもう政治に夢中になりたくないのだ」。彼は軽蔑されなくなるでしょうし、中傷されることもなくなるでしょう。彼は解放されるために働かねばなりません、彼を大いに当てにする者もおりません。

でも、彼なのでしょうか。彼は人間としての権利がないと感じて精神的に卑屈になっているのに、心の底では大変に満足しているとあなたは思いますか。彼の気分は殆ど何時もとげとげしい動揺が起きます。しかし、誰に対してでしょうか。そこでの情熱は、奇妙な結合を見せてくれています。というのも奴隷の意見は、暴君を憎むことが珍しいからです。彼は寧ろ、自由に思考して見た目には鬻ぎを買って非難を浴びせられているような人間を憎みます。

キプリングの小説『ジャングル・ブック』に象の美しい話があります。野生の象を調教するとか、反抗的な象を温和くさせるために、反対側に付いて制止し、押し、腹一杯食べさせるために、飼い馴らされた二頭の象が使われることにびっくりさせられます。又この話の中で最も説得力があるのは、恐らく次の事例です。「私たちはあなたと同じように強く、あなたと象も同じです。そして、私たちが行っているのはどんな仕事かを理解して下さい」。それは、議論の余地はありません。全ての動物は同類の模倣をします。しかし飼い馴らされた象が、反抗的な象を模倣しないのは如何に説明したら良いのでしょうか。この事例はより深みに嵌まるために苛々させると思わなければなりません。それは美しい話になります。もしも私に感嘆する気がなかったなら、私は反抗する象を憎まなければなりません。もしも私が味方に負けたなら、自分の誇りを残してくれるのは私の敵です。

今はもう亡くなっている或る詩人に、私は偶然に会えることになりました。彼は権力者たちを評価し、権力者たち自身で思考し、彼らだけの生活を統治するのを強く主張する者たちに対して、猛然と論難し弾劾していました。彼は悪意ある人間ではありませんでした。彼の語調には従順な大きい誇りが感じられ、お手本を示していました。「何のお手本でしょうか。私は奴隷となって死にます。そして自分を自由思想家であると主張する靴修理屋、土木職人、人夫、つまらない人々を理解するでしょう。もしも彼らを軽蔑するようにならなくなったなら、私にとっては何らかの学習になっています」。私は、その飼い馴らされた象を気の毒に思いますし、もっと強く腹一杯食べさせられれば、尚更です。象であるあなたの心を全て私に食べさせて下さい。私は良く理解する術を知ります。それは自由という愛であり、更に可能な限り自分を表現することです。あなたは、あなた自身にとっての最良の道を歩くのです。そして、あなたをそこで強くするのは私です。しかしあなたの同じ怒りから、私に分からせてくれるのは、あなたがその仕事のため

に生まれたのではないということです。

(一九一三年十一月四日)

七十四 （見えないものを見る教育）

或る日、労働者が教育方法について何か非常に衝撃的なことを言いました。「子供たちは教室の中にいるが、彼らが説明して貰っているのは雷雨や稲妻のようなものである。まさしくここでは明るく光って、雷が鳴っている。しかし、素早く窓やカーテンを閉めて仕舞っているのだ」。誰もが笑っていました。誰もがこの逸話から、象徴的に強いものを感じていました。教室の外は事物そのものであるのに、四方を壁に囲まれた教室の中は事物についての言葉であり、それらの言葉が私たちには大変に良い教育を行っているのです。

しかし、二つの疑問がその側面にあるのを見逃してはなりません。一つは、子供の精神の中でドアを開けている心を打つ生き生きとした経験を利用する術を知るべきです。時には、学習は次々に経験に滑り込んで来なければなりません。例えば、同情についての学習がより上手に入って来ますし、涙を流すことになる何か悲惨な光景もより深く次から次に見詰めることになります。あるいは慎重さの学習では、次から次に恐ろしい災難が語られます。あるいは節度の学習では、不愉快な酔っ払いのことが語られます。というのも鳥のように動き回る子供の注意力が、短い時間でもある対象に止まっていることは大変に珍しいからです。その機会を逃さないで下さい。その時の雷鳴を利用して下さい。

そこでの〈教育〉は、その儘残されます。けれどもそれは最初の瞬間でしかなく、注意力という純粋に動物的な瞬間です。この地球という惑星で、人間の特性は恐らく雷鳴に注意しないことであり、耳に聞こえないものを見ることです。落下の法則や天体の運動のように、あるいはボルトとアンペアの関係や三角形による間接的な測定や子午線の弧のように、眼には見えないものを見ることです。

何故なら実際に経験は、地球上に雨のように降るからです。全てのものを等しく濡らしますが、教育するのは等しくありません。人間の本当の勉強は、これらの事物の上に戻って来ることにあり、少なくとも輝いているものとか、燃えているものに注視することではありません。そして犬や猫がものを作ることは、全然ないということです。想像力で生きているだけです。計算をする幼い生徒は、自分自身で数が合うように努力する時間を持って純粋な記憶を軽視します。それは合理的でない結果を大変良く与えるものであるからです。彼にそのことを教えて、動物的状态から人間的状态へ移るのを助けなければなりません。例えば、思想そのものための思考が厳格であるということを彼に分らせることです。要するに、その子供が愚か者の話や眼がぎらぎらと光る衝撃的な体験や映画や、結局は想像力による全ての遊びを無視するようにならなければなりません。

想像力から理解力へ移動しなければなりません。そこには問題に役立つ何かがあります。それが二つ目の瞬間です。そして結局のところ、遊ぶ校庭と勉強をする教室は、二つの世界として分けて克服して来たその距離を、子供は感じ取らなければなりません。子供はそこで非常にその気になります。子供はそんなにも幼年時代を愛しておりません。抜け出たいのです。もしもあなたが子供に好かれようとして教育するのなら、あなたは軽蔑されることでしょう。

(一九一三年十一月十五日)

七十五 (ムラン駅の重大事故)

私がムラン駅での重大事故(1)のことをどうしても書きたいのを見たその官僚は、刺々しい口調で私に言いました。「国民という宮廷人様の気に入られるために、教育という裁判官が行わなければならないのは何ですか。運転士を監獄へ入れることですか。多分、そうです。監獄で予審が行われる者は、きちんとした服装をしていて、二人の憲兵に挟まれて、恐らく手錠をかけられているのでしょうか。その組織の仕事の重みがかかっている、会社には義務があり、更にそれ以上であること、一時間毎にその責任に専念しているかどうかを知ることがあなたは気にかけたりしません。そうです。無用の書類とあなたが呼んでいるものなどは、そこに放って置かなければなりません。汽車が信号機に向かって走り抜ける音を聞かなければなりません。もっと良いことは、連休にすることであり、それで彼に給料を出すことで、そうすれば事故はなかったでしょう。子供じみた話です。分業がこの大組織での生活を唯一確実なものにします。想像力で不安になっている頭の雑な人は恐らく、五十年に一回の事故を防ぐのですが、整然と一定の方法で行動し、規程によって定められているような彼ら自身の全ての責任に熱心な公務員たちは、日に十回も事故を回避しています。あなたはそのことを良くご存知ですが、わざと忘れています。あなたが想像して満足するのは、二人の憲兵の間にいる業務課長なのであり、あなたが平等の名の下に崇めているのは組織秩序の転覆です。それはまさに革命的精神であり、今では急進的精神と呼ばれています。そして現代の夢想家たちは、この世の中における現実の企業で、如何なる責任も取りません。否定好きであるだけです。しかし、あなたの支配は終わったのです」。

その作業衣の制服は石炭と油で汚れ、厳しい仕事の痕跡があるのも私は認めますし、それが全て監獄へ送られる一人の人間の姿にくっきりと示されているのも私は認めます。そして、これらの社会的な調和に抵抗するための何事も悪く取らねばなりません。一匹の犬も大変に良くその真価を認めて尊重しなければなりません。それというのも犬たちは、哀れで粗末な服装をした者に吠えるからです。彼らの情熱は大変強いものがあります。そして私が、時々直接的に反対の情熱を感じることに決して赤面しないのも、まさしくそのためです。全くの孤独で冷静な思考は、もしも血液と心臓の働きが後押ししなかったなら、勇気が湧くこともありません。

しかし本当のところ私は良い服装をしている人と同じに、監獄や手錠が少しも必要でない限り、如何なる人にもそれらを望んだりしません。私は少なくとも、あなた方の裁判よりも、少しばかり文明化されていない古代の裁判が少しは技術者たちに説教することになって欲しいと思います。彼らの職業上の義務は、十分用心している時や、十分に安全である時や、書類が立派に署名や副署がされて決裁された時には、少しも果たされないことを理解して欲しいと思います。「あなたは人間の死を齎すことになり得る何らかの方法とか規準とかを命じます。しかし、私は殺人者になることは全く望んでいません。大変明白に書かれた命令を私に出して下さい。私は通信記録に書き写します。その次に何が起ころうとも、私には責任がありません」とその官僚は言いました。以上が〈行政〉なのです。まあ、私は行政が好きではありません。危険を負わずに権力を行使する術ばかりです。そして、その術は異常です。現代社会の中で、より知性的で学識のあ

る人を確実に墮落させています。そして急進的な良識ある人の努力が、その汚れた醜い精神に反対して発揮されなければなりません。

(一九一三年十一月十六日)

(1) ムランは、パリから南東のセーヌ川沿いにある県庁所在地の町。一九一三年十一月四日にマルセイユ発の特急列車が、運転士の信号無視により郵便列車と衝突し、四一人が死亡した。運転士は直ぐに逮捕された。

七十六 決闘 (LE DUEL)

大変に危険で激しい怒りからの決闘後に、敵対する二人が和解することは好戦的な情熱に対して驚嘆すべきことですが、その習慣は自然な結果です。何故なら喧嘩好きの性質を持った人は、一般的に司令部で戦う覚悟がないからです。彼は熟考することがありませんし、後悔することもあります。幸福にも生き生きとした活動に我を忘れます。挑発や罵詈雑言は、何時も戦いの前に起きます。この種の人生は全く錯乱していて、規律がありません。それは戦争です。しかし好戦的な性質を和らげて冷ますような戦争で、それ自身の帝国によって平和が永続して行くように規制された戦いであれば、何でも構わないと言わなければなりません。

決闘に期待するのは、最も勇気ある人間や怒っている人間にとっても必然的に、或る賢明さが与えられていることです。というのも、この大変に規制された見直しにおいては、全てが想像力を生き生きとさせるために行われるのであり、冷やしてくれるためでもあるからです。厳格には孤独でもあります。激しい怒りや冒険の中に身を置いて、いわば情熱という海にヴェールを被せて隠し、敵そのものを見付けに行くのは不可能です。そうなのです。それ以上は何も言えません。交渉は仲裁人たちによって行われますが、礼儀正しく行われます。そして復讐の全ての事情が事細かに調べられます。それは喜びを台無しにします。

それ以上に武器によるこの礼儀を一番良く知っている人間は、左手の使用を望むような何か重大な間違いを犯さないように気を遣っています。先ず彼は規律を守ります。短気になって苛々することや怒りを感じるのを自ら禁じますし、それらを嫌悪するとさえ言えます。特に自分を最良に持って行って、冷静な勇気を出すように専念します。この精神的努力は情熱を鎮め、自然に憎しみも消えますが、それは少なくとも何よりも大変な訓練によるものです。

要するに戦いの結末が何であれ、敵同士はお互いに恐怖と怒りが常に一度に混じり合った、辛い勝利を勝ち取り、時々は同盟を結びますが、二人は人間というよりも動物に近いものです。彼らの一人ひとりには、意志的に行動を規制していましたが、危険と向かい合っているのは十分明白でした。自分自身を評価し相手も評価することは、各々にとって十分に論拠があることです。自然な好意という感情は、二人に共通した美徳から生じます。監視と緊張が長く延びた状態が続いて、突然に弛緩することによって助けられます。従ってそのような和解は、長く続く友情を生むことが出来ます。ですから決闘という制度には、奥深い英知があるようにも思います。

(一九一三年十一月二二日)

或る人が昨日、私に尋ねました。「まあ、比例代表制支持者殿は、あなたを感動させなかったのですか」。彼は私を同感させることが出来ません。如何なる理由で比例代表制支持者になるのか、私は大変良く理解しています。現代の選挙制度において、代議士は有権者に大変緊密に結びついていると考えられています。エリートの役割は、大衆感情に降りることではなくて、エリートとして際立って組織的な形態を取ることと考えられています。例えば私は、裁判官とか調停人の名を挙げます。彼のその後の役割は、私が気に入るように努めることではなく、自主的に自らの知性の光に従って公平に正義を取り戻すことです。同様に代議士は少なくとも、彼を選んだ人々の代弁者ではないと考えられています。つまり彼は、財政や軍事や外交について彼を選んだ人々よりも学識があり、自分の考えに従って行動しなければなりません。彼を選んだ人々の考えに従うではありません。要するにその時、代議士は有権者に裁かれるのではなくて、寧ろ同僚に判断されるのであり、結局のところ有権者を前にした代議士は基本的に、党派を前にした同じ代議士の立場に因らなければならないと言う必要は少しもありません。かくして今は、そのような代議士が裏切ったとか裏切らなかったなどという社会主義政党的の一員になっているのです。そして結局、もしもエリートが各政党的において調停者や指導者の権力を現実的に守ることが望まれているなら、比例代表制を支持しなければならなくなります。

しかし、まさしく私はそのエリートが何らかの政党的に所属していることを心配しています。彼が国事を判断するや否や、私は教養があつて学識のある人物を心配しています。大人物で能力があつて専門的知識もある人々は、全てが学位取得者で監督官で指導者です。エリートというものは可能事と不可能事を知るのは一人である、ということを必然的に信じます。従つて私は、組織された政党的が指導者たちと同じ精神によつて必然的に国民と対峙する集団になると確信しています。従つて私は、皆が大騒ぎしていた今回の急進政党的の統合を、そんなにも期待していません。それは政党的の決定が、有権者たちの要求や批判と対立することを可能にしています。そして、有権者がびっくりするか少なくとも無力化するや否や、それは自分の政党的に忠実でいる代議士たちには大変に容易なことである、という考えを私は持ちます。要するに、しっかりと組織された急進政党的に支援されている急進的な大臣は、私はそれを心配しているのですが別な言い方をすれば、他の政党的と同じように反動的で、そして、政党的を打破して市民の活動をあらゆる所で意識することが出来る唯一のものであるのは郡選挙の投票にあると私が見做すのは、政党的による偽りの組織化に反対するものであるからです。

(一九一三年十一月二四日)

七十八 (信望のある者と怠惰な者)

信望のある人々と怠慢な人々という二種類の人間が多分、生まれます。信望のある人々は既に乳母たちを困らせます。一本の歯が生える時には、彼らは叫び声を上げますし、殆ど身もだえる元になります。そして何歳になっても同じことが生じます。リウマチとか胃痛とか恋の痛手とか騙された野望のように、あらゆる種類の歯があります。大変に仲の良い二人の小学生を誰もが観察出来ましたが、二人の性格は正反対でした。一人は何時もリードして得な役割を演じていて、服装も最も高価なものを着ていました。もう一人はぼろ服で満足していて何時も言いなりでしたが、お互いに何でも楽しんでいました。一番は信望のある者で、二番が怠慢な者です。もしも国立音楽院が十分に大きかったなら、信望のある者たちは皆入学するでしょう。しかし、信望のある者は良く訂正しますが、それは感情的であったり、夫婦の愛や父親の愛によるものであったりします。彼らを律しているのは知性によるものです。それが彼らを明るくしているのであると直ぐに言いましょう。時々は大変に小さな滑稽さとか些細な癖しか、信望さには残されていません。

本来の信望さとは、意見や考えが支持されることです。そこでは暴君的精神と諂(へつら)う精神が何時も切り離せず一緒にいます。そこから信望ある者は服従することや命令することも好きになります。二つの事柄はお互いに結ばれていて、王やあらゆる種類の暴君に気に入られようとする一種の願いに沿うものです。信望のある者は権力を持たない限り、欲望という情熱によって民主主義者になることが出来ます。しかし彼は、決して急進的な平等が好きではありません。殆ど何時も、ことを終わらせるためには反動分子に戻ります。そこから私が分かったことは、知性や深い教養に支配された者が社会主義者になり、急進派を軽蔑したことです。

怠惰な者は着のみ着儘で、今の儘で満足しています。彼は自分自身のために行動するのであり、最早仲間のために行動しませんから、時には大変なエゴイストであると言えます。偏見もありません。その結果、聡明になると、非常に聡明です。彼の欠点は、意見に感動しないことです。そこから彼が良くなるのは怠惰であり、快樂を好むことであり、酔っ払いです。常にやや冷笑的です。時々、彼にも成功や力や富が、一種の高い信望を与えます。というのも彼は信望を軽視しているからです。しかしながら、管理者としての職業を駄目にして、信望のある者は命令に従い、彼は尊敬されないという苦痛を味わうことになります。

信望ある者は、自然に宗教に近付きます。何故なら、先ずは敬虔に係わり、晩の祈りで堤香炉を動かすことが重大になるからです。それはもっと深いことです。何故なら病気に憤慨し、死を恐れるからです。彼は、この広大な世界に小さな塵の自分を決して見たくないのです。しかし反対に神によって抱かれ、神によって救われますし、同時に呪われてもいます。というのもそれは信望のある者によって、何度も繰り返されているからです。怠慢な者は、看病するために決して神を求めません。彼は諦めて、もう神が存在しないことを受け入れます。全てを諦めて受け入れます。少なくとも彼は信望ある者を嘲笑する力を望んでいます。それは彼を遠くへ導き、美德にまでも導きます。ラブレーは怠慢な者です。パスカルは信望ある者です。

(一九一三年十一月二九日)

人類は何世紀もの長い間、予言を信じていました。今日でも、その全てを信じない人間はなかなか見付かりません。否定するのは大変に簡単です。古代からのやり方で鳥を引き寄せる前触れに、反対を言うのも大変に簡単です。「大きな石を積んだ馬車にあなたの車がぶつかって直ぐに、左側上空に三羽の渡り鳥をあなたが見たとしても理由はありません。その二つの出来事は関係がありません。二つの出来事のうち一方は、もう一方の出来事の原因になっていません」。多分、そうです。しかし前者は、もし車を運転している者が前兆を信じているなら、後者と関係がないということもないのです。何故ならこの不吉な前兆によって彼はより慎重になり、自分自身が不安になるからです。そして確かに、彼は左側に渡り鳥を見た後、それらを見なかったように運転することはありません。

しかし彼はもっと慎重になって、予言を打ち消して、事故を避けることになるのであれば言います。それは、そんなにも簡単ではありません。もし彼が予言を全面的に信じたなら、慎重にはなれません。というのも次のように自問するからです。「不幸は来る。私が注意してもしなくて同じだ」。もしも彼が何も信じていなかったなら、神に勇敢に立ち向かうかの如く、速度と大胆さを二倍にします。しかし、この二人の人間は何時も同じ一人の人間の中に一緒におります。彼の考えは、一方から他方へ揺らいでおり、突然に運命だと分かった時にはそれを追い払い、容易に道を引き返すようになります。その時は知覚と感情が次から次に活発になります。彼は稲妻の中にいるような閃きを信じます。彼は眩暈を感じて、実際のところは道に迷っている自分を見ることになります。

従って、事件に影響を与えないなら、予言とか前兆も決してありません。疑い深い不信仰もそれを何も変えません。不信仰と盲信が、同じ意味を帯びて来ます。彼は疑い深いとか軽々しく信じる人ではなく、茫然自失して仕舞うこともありません。従って麻痺されることもなく、予言が現実に関わり始めるのを見ても、身を守る術もありません。例えば私が金曜日に、柵が閉められていたせいで車の中で怪我をする、と予言されたと仮定します。もしもそれが金曜日で、私が全速力で車を運転しているのを考えるようになったなら、そしてもしもその瞬間に閉じられた柵が現れて、その偶然が私を悩ませ、ブレーキをかけるのが少し遅れたなら、と仮定します。私が軽々しく信じようが、そうでないとしても、結果は同じです。何故なら私には疑う暇がないからです。ここでの真の英知は、予言の力を信じることですが、少なくとも私たちの感情や行動については神秘性を追い払うことであり、先ずは否定し、粉々にすることです。私は、予言をもっと危険なものとしてしか見ていませんし、それに対しては慎重さで武装します。

(一九一三年十二月二日)

八十 (贅沢と税)

贅沢は二つの意味で有害です。先ず一つには、日々の労働を使い果たしているからです。多分、一年で一か月しか住まない大宮殿を建設するのなら、石工たちは百世帯の人々に百軒の快適な家を造れます。そうすると石工たちには賃金が出ますから、誰も辛い目にはあいません。一方には石工たち、他方には靴修理屋、高級家具師、園芸家たちとの取引しかありません。結局のところ彼らにも、石工たちが野菜や洋服筆筒や靴を必要としている限り、皆が家を必要としています。一人のお金持ちが庭園を一つ造るために、百軒の家を焼き払うのを想定して下さい。この世には少なくとも百軒以上の家があります。もしも百軒の家を建てる労働力を宮殿建設に向けたなら、絶対に焼き払ったのと同じ結果になります。大変に深い処に隠されたこれらの関係は、決して十分には語られておりません。

もう一つには、贅沢は不平等を悪化させて酷い格差社会を生むことになり、更に有害でもあります。そこから資本の役割について、大変に一般的な軽視があります。もしも資本が、大企業や中央集権化された労働に許されて取って置く貯えでしかなかったとしても、資本は絶えずあらゆるもののためになければならず、お金持ちは皆の資産の管理人でしかありません。もしも億万長者の生活が質素になったなら、最後には彼が手に入れたものを返すことになり、絶えず返しているのも同じです。その上、彼自身の仕事は組織化され、監視され、調整されていて、必然的な仕事になります。労働者はそのことを良く理解しています。しかし贅沢は虚栄心が強く、無知で無縁で醜悪な別の種類の人間を作ります。そして彼らの避けられない情熱は、全てのお金持ちに対して反対する民衆を掻き立てます。そこでの努力は間違いを齎します。

収入にかかる税も間違いを齎します。そのことを良く考えましょう。独り者の貯金は世の中を富ませます。もしも独り者の会社が必需品の生産を上げたなら、世の中を豊かにします。でも巨額の出費は、私たちを破産させます。税は何時も巨額の出費を対象とするに違いありませんが、民主主義的努力をしても、一瞬ここで思いとどまらせるようにはなりません。居住者の人数による空気の量についての税です。装飾や化粧や豪華な車や召使いたちに対する税です。列車の中の贅沢な場所や速度に対する税です。初物の野菜に対する税です。住民の人数での面積による庭園や宮殿に対する税です。その代わりに、もしもお金持ちが大地を開墾して、沼を排水して、完全に耕作作業を行うなら、その収入は全ての人々に役立ち、その支出は全ての人々を豊かにします。その収入についての税金は、全てが実際に貧しい人々の幸福に向かっています。あなたは靴の大製造業者に重税を求めます。それは靴についての税です。あなたは装身具の小さな製造業者には厳しくありません。その結果、私は羽飾りの付いた帽子を持っていますが、靴には穴が空いています。

(一九一三年十二月三日)

(次章へ続く)

八十一 頑固者 (OBSTINATION)

やり手のその男は私に言いました、「あなたは入念に緊張された精神の持ち主ですから、私は感嘆しています。二十年前から私はあなたの政治的主張が些かも変わっていないのを知っています。あなたは周りのあらゆるものと余りに徹底的に戦いすぎますが、自分を見失うことはありません。その代わりに直ぐにあなたの領域に戻ります。私の眼には、あなたは一種の響感を買う頑固者に見えます。というのも結局のところ、何もかもがあなたの周りでは変わるからです。政党は新しい組織を仲間に入れて、新しい問題を提出します。その様な経験は、注意深い人間の思想を変えない訳には行きません。二十年前には殆どラジウムのこと無線のこと話しませんでした。物理学者たちの考え方は、激変させられました。ですからあなたは物理においても、コレージュの時代から何も習って来なかった人間のことを、政治的に分類してくれないでしょうか」。

私は、頑固者になったことを敢えて言います。しかし、その理由を大変良く知っています。もしも自由と平等と博愛が、星雲とか北極とか水素の溶解温度のようにこの世で観察しなければならぬもので、発明して作り出すものでなかったなら、私は望遠鏡とか拡大鏡を手にとって、人々の間から私の考え方の対象となる者たちを探します。その様にして大変に多くの純真な人間が生まれます。彼らは心から真実を愛し、望遠鏡を覗いてそれを探します。そして私は、彼らが一つの考えから他の考えに放浪して、昨日は社会主義者、今日は労働組合活動家、明日は王党派に放浪しているのを眼にしました。そして私は、理念のこの不安定さが何処から来るのかを良く理解しました。彼らの理念は、現実の事実を主張し望まなければならない代わりに、その中で唯一のものを主張することに期待しているのです。

やり手のその男自身は多分、騙されています。道徳的真実と、事物としての真実を間違って類推しているのです。事物が如何であるかを知るには、それらを観察しなければなりません。党派にこだわらずに、頑固にならないことです。しかし自由と平等は、磁石とかラジウムのように、決して自然の物ではありません。それらは望まなければならないものであり、風や潮と違って、それらが望まれるからあるだけなのです。もしも多くの人々がそれらを望んでいるとしたら、そうなります。もしも諦めたとしたら、決してそうなりません。ですから私としては、気高い独創のための監視人になるのです。正しい意志が私の判断の全てになります。私が望むとすれば、それらが真実になります。私が望むのを止めれば、もう何もありません。人間の行為全体として私に示しているのは、何時も自然の法則としての力であり暴君です。しかし、私はそれらを何時も否定します。何故なら人間の秩序は、盲目的秩序に対する勝利であるからです。例えば平和と戦争は、二種類の自然の行為ではありません。勿論、戦争は盲目的秩序としての行為であり、平和は人間の秩序です。戦争は忍従するものですが、平和は望まれているものです。

(一九一三年十二月七日)

「もしあなたが平和を望むなら、戦争に備えなさい」。そうです。しかし私はそれ以上に最も大切なことが、余りに早く無視されているのに気付きます。平和は望まなければなりません。しかし平和を望むこととは何でしょうか。毎朝、新聞を広げながら自問することです。「ドイツ人たちは戦争を望んでいる。彼らは戦争を始める。それは今日だろうか。明日だろうか」。この考えを持っている者は、平和を望んでいるとは言えません。せいぜい平和を望んでいるに違いないと言えるだけです。意志という適切な言葉で、全ての意味を言い換えないとはいけません。

意志とは、単に望む者の気持ちばかりでなく、他の者の気持ちも変える驚くべきものです。あなたには敵がいます。そのことをあなたは言われました。敵自身がそのことをあなたに言ったのです。その後で、もしもあなたが彼の言うことや行うことを全て悪く解釈して、人が言うことをあなたが信じたなら、もっと適切に言うならもっとあなたが彼自身を信じすぎたなら、あなたは喧嘩をすることになります。そして、もしもあなたが今の状態を平和の状態であると言うなら、平和というものを知らないのです。実際に見た目には平和でも、その下に戦争があります。大変良く言われるように、平和は武装します。平和は不安であり、疑い深いものであると私は言います。不安定な平和の状態に止まるには、怖がらせる以外に他の方法はありません。しかし、そんな風にして生活するのは決して人間ではない、と私は言います。そうなのです。それは決して平和を望むことではありません。

もしも或る人が雨とか良い天気を望んでいると私に言ったなら、私は彼のことを笑います。でも多くの人々は、平和や戦争が或る種の大気現象であって、雨や良い天気のようなものであると信じています。そして、天気が良くても家に傘があるように、平和の時代にも武器があります。何故なら、何時までも平和が続かないことを良く知っているからです。けれどもこういう彼らも、平和を望んでいるとあなたに言います。しかし、それは決して正しい認識ではありません。

平和を望むことは、平和や戦争の責任ある張本人が、平和そのものであると先ず自問することです。それは正義と不正も絶対に同じことです。気に入っている夢の中で、お金持ちで暇があって、他人の労働を消費して生活し、おべっか使いや居候や道楽者に囲まれているように見える人間をあなたが導いているのですが、それにも拘わらず彼は言います、「私は正義を望んでいる」。意志による最初の効果は、もし遊びでなければ、真の人間的繋がりを考えることであり、心地よいこれらの夢を追い払うことです。同様に、平和へ導く現実的な意志による最初の効果は、公開の演説会や討論会で、大変に安易で快い怒りを鎮めることです。他人の感嘆に身を捧げ、心の底では自分自身に感嘆することです。しかし、もしもあなたの意志がこの種の食道楽を少なくとも乗り越えることが出来ないならば、その時は平和を望んでいると言ってはいけないことになります。

(一九一三年十二月十八日)

八十三 誠実さ (SINCÉRITÉ)

一人ひとりが自分の思考を運用しなければなりません。私は選択すること、全て同じ計画を立てないこと、ショー・ウィンドーの骨董品のように考えを並べないことを理解します。しかし決心します。木の葉が舞う旋風のように考えが通り過ぎて行く精神は幾つもあります。世論は一陣の風次第です。誰かある人が、ある時は陽気に感じて、ある時は悲しく感じるように、良く晴れた朝に王党派になって仕舞います。そして、彼らはこの精神の無気力を誠実さと良く呼びたいのです。一人ひとり是最も確実なものを、自分の思想によりしっかりと結びつけなければなりません。外部理由による最初の要請に応じないことです。

ある人が私に言いました、「あなたはカプチン会修道士のように話します。例えば、あなたは急進的な信仰を持っていますが、それを失うのが心配なのです。その時、あなたは事実を否定し、議論を否定します。それは強い信念になっているのではないのでしょうか」。

滑稽な作り話をしていなさい。私は無視します。そんな頑固さから非難して逃げる自信が、私には十分にあります。何故なら、私は思想という塔を自ら進んで造るからです。時折、敵に対して弁明するのが好きであるからです。もしも私のために思想が新しくなる時に生き生きとはっきりして来るのでしたら、私の欠点は寧ろ精神の不安定さとか移りやすさです。私は自分を知っている時に前進します。私は、諦めることを自ら禁じ、沢山の事例を見て来た思想の敗走を自ら禁じます。そして感動的な出来事とか、誰かの演説とか、私が読んだ本によって観念の来襲が起こったなら、私は先ず自分の強さに戻り、防衛に準備します。そして集合ラッパを鳴らしながら、理性を奮起させ、証拠を引き出し、屢々非常に骨を折って苦勞して抵抗した時、私は自分の防衛が正しく、敵が大変に弱くなったことに翌日気付きます。経験が私に、この一時的な頑固さが有効であると分かせてくれました。そして良識がとっくに望んでいることは、何年もの間推敲して来た考えを、恐らく二時間の躊躇や労苦では諦めないということです。それらの考えは、良く似た証拠にも抵抗していました。そして私は、自分自身に対して用心しない者たちは何ものにも立ち止まらず、何も掴んでいないことに気付きました。

何でも単純化して吟味していた社会主義者や急進主義者の話を、私は昨日聞きました。急進主義者は言いました、「私は、社会主義者になることが断じてありません。それは私にとって滑り易い危険な大地です。自然の激しさを鎮めなければなりません。その思想は、情熱と余りに多くが一致しています」。社会主義者は答えました、「穏健さはあなたには美德である。しかし、私にとっては悪徳だ。そして本能は私を余りに保守主義者にするばかりである。それ故に私は大河を進み、橋を遮断したのだ」。二人とも尤もだ、と私には思えました。そしてこの話から、時々単に目的に向かって考えを整理するばかりでなく、情熱の脅威にも従っていることが分かります。

(一九一三年十二月二日)

八十四 舞踏靴を履いた思想家たち (PENSEURS EN ESCARPINS)

私は先日、或る社会主義者に会いましたが、大物である彼は急進派の大臣たちが無能であると良く言われる冗談を繰り返し言っていました。社会主義政党が、自ら活を入れるのを止めたのは何時なのでしょう。何故なら、彼らのジョレスも同じように論じられているからです。彼が大臣であったなら、どうでしょうか。その代わりに本当の政治家として有名になるには、右派の連中に何らかの保証を与えれば足ります。もしも有権者たちが代議士たちと同じ位に愚か者であったなら、このエリートの権力は恐ろしいものです。

私は、愚か者と言いましたが、決して馬鹿者とは言いません。愚か者は純真で、新聞を読んで意見を求める人ですが、田舎の森に住む何人かの頭の良い人を除いて、新聞に書かれていることは全てが実際に反動的であると考えることがありません。私が言おうとしているのは野心家たち、お金持ちの言うことをきく追従者、アカデミー会員たちに阿（おもね）る者、ネックレスをしたダンサーや劇場や自動車や上流階級の生活を讃美する者です。急進社会主義のサロンの中でさえ、コンブ（1）とかプルタン（2）を敢えて褒める人が何人いるのでしょうか。夫人たちは顔を顰めめます。彼女たちは、文化とか少なくとも精神的な基盤を持っている似たような考え方でないと決して信じません。ところが、この考え方そのものは全く力がないのです。というのも煮こごりになった鶏肉とか羊の股肉の如き盛装した会食者たちとは何なのでしょう。貴族の国において何なのでしょう。勿論、それは作家や演説家という愚か者たちを支配しています。同様に、彼らがバレスとかコシャン（3）への称賛を小さなものにしなかったように、彼らは自分たちを余りに下層民であると信じています。それ故に、もしも盛装している軽蔑すべき連中を支配しているヨーロッパのジャーナリズム全体を相手に対立しているなら、それは何なのでしょう。小さな事務所にいるあなたがエナメルの舞踏靴を履いて舞踏会とか夕食へ出掛けるのを私は眼にします。あなたは松露を添えた七面鳥を前にして、国民を三回裏切ります。

大変に上手く飾られて、美化され、雄弁な情熱に対しては、用心して素朴にならなければなりません。多くの人々が社会主義者になり、彼ら自身が結ばれるために統一されますが、そのことは悪いことではありません。しかし時々、悪魔が利益のことを思い出します。というのも、もしも県内の下層民や急進的大臣を罵るのなら、それは既に国民を冒瀆していることとなります。もしも政治的策略を、所謂経済の〈実験室〉に閉じ込めるために軽視されるなら、それも国民を冒瀆しています。まるでローマ教会との戦いが無意味でなかった如く、もしも真の科学によって公立学校そのものを守りたいと皮肉に言われるなら、それも又国民を冒瀆しており、既に裏切りです。それは舞踏靴を履いて常に思考することなのです。

(一九一三年十二月二六日)

(1) エミール・コンブ（一八三五～一九二一）は、第三共和制の時に首相（一九〇二～〇五）になった急進党の政治家。政教分離法案を提出した。

(2) ウジェーヌ・ペルタン（一八一三～八四）は、政治家であり、「トリビューン」紙編集長も務め、第二帝政に反対した。

(3) 一九一一年十一月にフランスの議会は、ドイツにモロッコと引き換えにコンゴの一部割譲を認めた条約を賛成三九三名、反対三六名で批准したが、この時カトリックの保守主義者コシャンはバレスと同じように反対した代議士の一人であった。

祖国に対する義務が最大の義務であると良く言われています。しかしそれは正確な話ではありません。その時は国家権力が戦争を評価して、他のことよりも優先していることを言いたいのです。それが服従する義務である時、私たちは最早熟考し議論する時でなくなっているのは本当です。それは義務の中で最も急を要するものですが、寧ろ順番について詭弁を弄さず言うなら、順番だけではないのです。それと同じように困難で程度の高いことがあります。つまり公平でなければなりません。

公平であることは、つまり決して情熱に従って判断してはいけないことです。知識もなく人のことを話してはなりません。何故なら彼は、私の商売上の競争相手であったり、地位を争う相手であったりするからです。「彼は愚かで、無知である」。知識は、例えば大臣の友人のように或る欲しい地位に就任されるように使われる力でもありません。あるいは取引で他人の無知とか弱さとか臆病を利用しないことです。決して彼より優位に立たないことであり、それ自身を利用しないことです。自分の利害に絡む事件を自ら裁かなければならなくなるや否や、彼を疑うことです。正しい仲裁人を信頼するか、彼自身がその仲裁人になろうとすることです。論争において、甘いのを知っている論拠で擦り切れないことが成功を齎します。結局のところ良い方針に従うことです。「もしもあなたが彼らの立場であったり、彼らがあなたの立場であったなら、彼らがあなたと共に行動するのをあなたが望むように、あなたは人々と共に行動しなさい」。又、もう少し先へ行くには、彼には望んでいないような寛大さを、もう少し多く人々に示すことです。何時も人々の心の裡に誠意と善意を想定することです。何故なら、一度も騙されなかったからです。不愉快な恥に顔を赤くしなかったからです。情熱を模倣して正しく信じている人々が、酷い人間嫌いにならなかつたからです。結局は怒りとか恐怖という動物的活動を屈服させることです。そして、特に大衆や集会の中で、大変に力のある怒りや恐怖の熱気に抵抗することです。これらの義務は明白にあります。自分自身の管理がしっかりと守られる限り、それを忘れるという権利はありません。

その義務は突然考察し検討することですが、敵としての制服姿でいる人間は全て調べることはありません。全ての調停方法は試行されていたこと、これらの人々を信用し当てにしていたこと、怒りによって怒りに応えることから非常に縁遠いのを信じるのが義務です。それらは大変明白に理解されていまして、同じ議論においても毅然として忍耐強い友情がありました。この仮定によれば義務とは、殺人者たちの胸が最も悪くなるギロチンへかけられる前に用心することではなく、一斉射撃を浴びせるようなものです。軍事上の義務は結局、他者から一時的に見捨てられたのを意味します。そうです、命令が下った時なのです。しかし命令の前にあらゆる機会に弛むことなく、あらゆることに情熱的な意見に対してさえも正義という意志を強力に主張するために守られている、自由というものを言いなければならぬのが理解されます。この気高い思想だけが、服従することの必要性を前もって清めて正当化することが出来るのです。そしてそれは一人の兵士が、殺人者と異なり、心の底から平和を望んでいるからでしかありません。

(一九一三年十二月二八日)

八十六 クリスマス旅行者 (NOËL VOYAGEUR)

現代の全記録が大災害によって破棄されて人間だけしか残らず、子供たちが知る術をすっかりなくしたら、と私は仮定します。子供たちは日が長くなるにつれて、力強くなって行きます。春と夏は、希望を与えてくれます。クリスマスと復活祭は、六月に似ています。しかし十一月の万聖節の頃になると、彼らは空を見ながらもう既に希望を失っています。十二月には死ぬことを思います。恐らくまだもっと純真な心の状態があるとすると、毎朝クリスマスの歌が歌われ、昼には復活祭の歌を歌い、毎日夜になるとこの世の終わりを待ちます。毎日が新しい太陽です。全てが奇跡です。その上、その繰り返しやもっと長く生きてきた人々の証言が、それらの恐怖や歓呼の感情を鎮めます。絶望から目覚めるには日食が必要です。今日連続して起これば、もう私たちが欺きません。夜と昼が地球の周りを散歩しています。私たちの所が真夜中になれば、他の所の人々は真昼になるのを私たちは知っています。そして月が輝く時は、太陽が反射しているのが分かります。日食も月食も最早奇跡ではありません。月や地球や太陽系の光を通さない天体は、全てが本影と一緒に移動しています。太陽と月は食では決して消えません。昼と夜は最早生きたり死んだりする存在ではありません。相互の位置によって同時に、こちらが夜であればあちらは昼です。夜は、地球から見た地球による太陽の食です。

四季も同じです。私たちの半球が冬であることは、もう一つの半球は夏です。夏はもう生まれたり死んだりする存在ではありません。地球は軌道上を回っています。クリスマスはただ場所を変えるだけです。復活祭も同じです。クリスマスという祭日と対極にあるもの、真夜中のミサには最も暑く、最も短い夜を尋ねることも出来ます。もう一つの半球から到来している宗教とは、季節が一致しません。復活祭は秋のものになっています。復活は陰鬱な霧の中にあり、冬の前兆です。自然は実際に春に目覚めるという考えが、何の回復にもなっていません。自然はこちらで目覚めますが、あちらでは眠っています。一つの考えは他の考えを訂正します。というのも全体を一つにしなければならないからです。花々が列を作る春は、少なくとも地球を一周すると考えなければなりません。冬も同じです。同様に、月が太陽の前を通過する時、何キロメートルかの日食は部分日食でしかなく、地球が最も大きい部分であっても決して太陽を全て消すものでないのを私たちは知っています。かくして一人ひとりの精神は村を出て行きます。有名な万聖節は同時に復活祭になり、復活は同時に死にもなります。手品師の小球を見る時は、何時もびっくりします。しかし、小球が来たり行ったりするところを精神では分かっています。これらの明晰なイメージが、法螺吹き男たちを失墜させました。

(一九一三年十二月二九日)

暴君の軍隊が再編成されるのは大変に明白です。私は二十歳の頃に、プラトンが言っていた最も美しい美德の付与された〈暴君的魂〉の一人を知る良い機会がありました。彼は自尊心に誠実でした。何でも恐かったのですが、自尊心によって勇気を出しました。軽蔑で生き生きしていました。不平等はその養分であり、アルコールでした。贅沢と奇跡と祭りを崇めていました。美術と文学への情熱が恋人でした。或る人々にとっての快樂は、別の人々にとっての美德と労働を前提にするという感情が、道德家と道楽者を支えていました。もしも小人の儘であったなら、小人を愛していました。というのも暴君の眼にとって服従は崇高な美德であるからです。そして平等主義の意志というものを本能的に酷く嫌っています。彼に従う運命にあったかの如く、エリートの新兵のように私を愛しました。彼自身としては王の傍にいる立派な近衛兵に昇進するためでした。彼は統治する行為に自信を持っていましたし、間違っただけではありませんでした。私は、大変良く言われているように人を叱責する彼の恐ろしい眼を見ました。彼は、ブーランジェ將軍と一緒に陰謀を企てました。皇帝一族のボナパルト一家が彼の最後の望みになりました。それは、間違った服従と貧困を背負い込んだ若者にとって魅力的なお手本でした。しかしながら私は、狂ったように本を読みました。精神の不平等を考え、そして私はそれらが些細なことだと感じました。私は勇気を考えましたが、そこに軽蔑と怒りと野心と怖がることの恐怖を発見しました。贅沢な人間の眼から見ると、偉大な者たちは本来的に小人たちからの報酬であった、と私はこの尊大な正直さを考えました。その時から私は今までにない大きな誓いを立てました。

私はこの種の人間を完全に理解しています。私はそれを嗅ぎつけます。それは私の獲物です。私はそれらが共和国の中で放浪しているのを見ます。帝国を探しているのです。何時も国民の崇高な純真さや服従する喜びや熱狂さに、鞭を打って刺激しているのです。無記名投票に反対している彼らはそれを嫌っています。彼らは酔った群衆であり、暴動であり、恐慌であり、ついには戦争を始めます。何時も目標に到達すると信じています。何時も彼ら自身が持っている信仰を、まさに人にも伝えようとしています。これらの人間たちと在民主権の間の戦いに終わりはありません。

今、彼らは何をしているのでしょうか。彼らには外国の脅威という方法論しかありません。それは恐怖の軍隊であることを認識しましょう。この共和制という病は私たちが貫いて来たのであり、バルカン半島の戦争の結果でした。そして新聞社や取次店や大使館を運営する彼らは、でっち上げたりしないのです。でっち上げと言うよりも、彼らのでっち上げは直ぐに本当になるのです。そして最も小さかった国境の事件は、彼らによって大きくなり、あらゆることがとやかく言われるようになり、直ぐに恐るべきこととなります。嘘が本当になると、頑固な否定には反対しなければならず、今度はその頑固さによって本当になります。戦争への不穏な気配には、否と言うことです。何故なら不穏な気配が問題になると、それを否定する声は潰されるからです。そのことを良く考えて下さい。

八十八 事実 (LE FAIT)

自分を抑えて宗教上の儀礼が守られる限り、私は実験的方法を尊重します。しかしそのことが話されるや否や、精神的貧しさを予想します。まさしく講演が衣服を見せるだけのようアカデミーの儀式においては、取分けそうです。緑なし帽を被った人が、経験は最後の言葉であり、思想がそれを支えなければならないと言うや否や、緑色の法衣が熱烈に同意しているのをあなたは良く考えます。洋服だけで、頭も体もない洋服屋のショー・ウィンドーを見る時、私はこのアカデミー会員の話を聞いているように思います。

〈事実〉は神ですが、全ての神は曖昧です。子供の玩具のように、人間は神を打ち砕かねばなりません。というのも、もしもあなたが望むなら、立法者とか幾何学者の力は現実の事実の中に自分を参加させているからです。事実を正確に再発見し、崇めなければなりません。あるいは上手く沈黙を守らなければなりません。簡単な例は、偶像崇拜や真の信仰によって私が期待しているものを理解させています。私が書くその場の空の子午線も、現実には存在していません。それは単に幾何学上で思考したものでしかなく、それは望遠鏡で目盛りのある円形の金属板に書いて作ったものです。しかし全く広大な大空を、その大きさに区切っています。子午線はこの世に存在しません。しかし、高さというものの中で広大な大空を区切っています。全ての星がそこを通過しますし、そこではそれが事実です。犬も恐らく同じ様に星々を見ますし、月に向かって同じ様に吠えます。しかし、その犬にとって子午線、赤道、黄道、春分、空の天体とは何でしょうか。これらの幾何学上の発明は、決して事実のものではありません。確かにそれらは観念上のものですが、観念ではなく、決して事実でもありません。せいぜい出来事であり、事件のようなものです。

人生は大切である、と誰もが分かっています。しかし、それは犬が月に吠えるように、出来事に吠えていることでしかありません。大切な人生とは、事実ではなく、子午線という見せかけです。物事の黄道や赤道や子午線を発明することが大切なのです。そして近代実験医学の祖クロード・ベルナールは、そのようなものの何かを上手く発見したのです。大変に正しい行動を求めようと真剣に考えている時は、事実を表しているこの幾何学を何時の日か身に付けて、孤独にならなければならないのです。〈事実〉というこの言葉は、言語に閉じ込められている英知の事例です。その事実は何時も或る意味で、人が行ったことの何ものかです。しかし現代のアカデミー会員の思索家たちは何も生みません。力がないのです。

言語の中にも驚くべき際立った曖昧なものがあります。〈直線〉です。直線は何ものでもありません。しかし人間の奇跡である直線から全ての曲線が生まれ、経験も生まれます。そして、人間の問題として更に正確に言うなら、その時は直線が事実を表されると言わねばなりません。もっと適切に言うなら、存在することの事実を表されるのです。天文学を行うには、望むこと、思い切ることです。結局のところ発明することではなければなりません。もしも正義を行いたいと思うなら、何をするのでしょうか。正義を示し、平等を示し、平和を示すことは待つことではありません。固定化された子午線のように、不正を出現させている人間の問題の中にそれらを課すこ

とですが、直ぐに消えて仕舞います。というのも、その星は今では、あなた自身であるからです

。

(一九一四年一月四日)

「以上で私はオカルティズム（神秘主義）に行き着きました。この問題については多くの愚かなことを現在も自問していますし、オカルティズムそのものによって調べる意味は何もありません。私が催眠現象や接神論に係わり始めたのをあなたは知っています。今も私は続行しています。道徳や経済の進歩が、この一世紀の間の科学的進歩に比べて十分でないということをあなたは確かに感じています。しかしこの事実には調和の欠如があることもあなたは気付いています。ところでオカルト現象の解明が成される前に、道徳的経済的観点での結論は、現代科学の大発見が工業的観点で手に入れるのが出来たことと同じ様に偉大であるように私は思います。催眠現象、交霊術、テレパシー、心霊論は幸いにも蒸気、電気、無線電信そして航空に匹敵しています。アメリカ大陸発見は、眼に見えない世界や人間の潜在能力の側面で言うなら些細なものです」。

或る理性的人間は、この様に私に手紙を書いて来ましたが、彼自身は稀有な英知の持ち主です。それでも彼が気の済むまでオカルティズムを探究していることを、私は何も恐れていません。彼はそれを大変に醒めた眼、不屈の意志、誇りある感情で見えており、それらは神も悪魔も追い出しません。しかし神秘的力に多くを期待し、自分自身に期待するのが非常に少ない人々が多くいることを、私は如何に理解すれば良いのか、と言うことは有益であると信じます。それは私の眼には〈道徳〉でしかなく、あるいは換言するなら〈意志〉と〈信仰〉の学問であると言えます。そこでは殆ど思考することはなく、現代の機械には無知な禁欲主義者たちが現代の私たちと同じ様に、信じられない程に優れていたのは本当のことに間違いありません。事物に対して驚くべき洞察力を持ったり、遊び始めるや否や子供の純真さを持つ人間にはこと欠きません。彼らは悲しみや病気でさえも、多くが気分的なもので、気分を変える方法があるとは決して信じません。彼らは熱狂の感染によって、熱狂という武器を理解します。計り知れないこの力と対峙して或る崇高な定めを考えます。彼ら自身は怒りそのものに身を委ねます。まるでそれは神聖な病気のようなでした。

しかし、ここまで隠された力を仮定すること、全ての道徳的秩序を解決することは、如何なる有益な光も齎しません。というのも、それは何時も異なった言葉を使っても、古代の宗教でしかないからです。それは何時も外観上のことで、現実においては、慰めを求めてロザリオの祈りを三回言う女のように、何かの薬を見付けたいのです。彼女はそれをロザリオの祈りに見出しますし、ロザリオの祈りを崇めます。その他の人々は精神と呼びます。あるいは勇気や信頼を与える霊力を探します。そして何時も、最も有効で純真な姿をして再生するのが宗教です。しかし考察は結局のところ、これらの事実の源泉に戻らなければなりません。それは二重になっています。情熱と、情熱を伝染する力があり、肉体構造が良く説明しています。そして筋肉を弛緩させたり緊張させたりする力のように、意志による行為と力があります。それは良く知られている力ですが、立派に私たちの役に立つように変えられているのであって、まさしく情熱の魔術です。要するにオカルティズムは、何時も曖昧であるのが真実です。死者の精神が私たちを慰め、生

きる助けになるのは真実そのものです。しかし、テーブルの脚にそれを見出すことは情熱でしかありません。ところがモンテーニュの『エッセー』の精神とかエピクテトス(1)の『概論』に見付けるもの、それが理性です。私たちの空間のことを考える霊力を恐れましょう。そして、それはアルコールが私たちを無頓着にさせるように、理性を与えるものなのです。

(一九一四年一月七日)

(1) エピクテトス(五〇頃～一三〇頃)は、古代ギリシアのストア派の哲学者。

私は、殆どお金を遣わないけちんぼを大いに称賛しました。経済的考えでは、何故何時も贅沢な支出に好意的で、けちんぼを軽蔑し、浪費家を称賛しているのか、私は十分に説明しました。でも、けちんぼは決して儉約家ではありません。彼ら二人は次のことで異なります。けちんぼは暴君です。けちんぼは経済的に有益ですが、政治的には恐るべき者です。けちんぼは、決して何も要求しないという意味で有益です。それが可能である時、贅沢のための労働は自分だけの快樂のためであって、そのことは皆を貧しくしているということになります。生産していないのです。恐ろしいと言うのは、彼のお金は支配するための道具になっているからです。

地主、金貸し、株主、店の主人そして企業の管理者として支配しているのです。バルザックの〈グランデ〉と〈リグー〉を見て下さい。そして特に〈ゴブセック〉です。けちんぼだけにある喜びは、人間だけにある楽しみであり、膝を屈して情熱の全てを理解することです。彼は宝を消散させることなく、反対に増やします。というのも、彼の奴隷が豊かにするからです。その描写は、モリエールの〈アルパゴン〉に書かれていますが、十分ではありません。私はそれを宮廷の中央に見たいと思います。読者にも見せたいし、呼びかけることもなく判断するのです。後者を助けるように宣言して、前者を破産させます。屈服させられるのは、盗みたいと思ひ臆面もなく諂（へつら）ってお金を支払う山師ではありません。一家の父親や小作人や、百倍ものお金を支払い本心から尊敬し感謝している発明家によってです。〈けちんぼ〉は〈野心家〉の中でも一番奥深いように思います。幹部会に入って、古い手袋を取り除き、毛むくじやらの手を見せて、そこを支配するのは何という凱旋でしょう。それは刺繍で飾られた服の中に着ている灰色のフロックコートです。

今日の〈けちんぼ〉は度を超えています。彼は何人かの仲間と一緒に孤独です。すなわちそれが出来るのです。お金は、あなたと私にとって何時も大変な力になっていますが、それを利用するのが下手です。私たちは直ぐにお金を、奴隷と交換します。〈けちんぼ〉は、お金を支配して自分を豊かにします。もしも誰かがそれを軽蔑したなら、復讐する機会を狙うと同時に、お金持ちになることも狙います。逆に、もしも支持者の一人に報いたなら、彼は再び利益を得ます。

それ故にももしも結論を考えるなら、〈浪費家〉と〈けちんぼ〉にはそれ程の違いは決してありません。どちらも支配したがつているのです。しかし、〈浪費家〉は上手に出来ません。人を喜ばせて、破産します。〈けちんぼ〉は、百姓が羊の群を持っているように、おべっか使いの群を持っているのです。〈浪費家〉は自分の力を行使しながら、財力を消費します。〈けちんぼ〉は行動して、自分の財力を増やします。

結局、公平さを図るには、大きな収益を得られるなら、〈けちんぼ〉は贅沢のための仕事も十分に奨励すると言わなければなりません。そして司法官のように彼は、莫大な支出に暗黙の同意を与えています。しかし特に恐るべきことは政治的力です。平等や権利や世論にさえも反対しているのだと私は理解しています。というのも、刊行されたものは全てが〈けちんぼ〉に統制されているからです。そして仕事は何であろうと、最も多い所得に税を課すのは正しいことです。

。人はその様にして莫大な支出と、それと同時に起こる暴君的力に反対するようになります。

(一九一四年一月九日)

(次章へ続く)

一ノルマンディー人のプロポV

【2014年9月号】

<http://p.booklog.jp/book/87421>

著者：アラン（翻訳：高村昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/87421>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/87421>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ